

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	2372300752		
法人名	有限会社たつみ		
事業所名	グループホーム悠遊荘		
所在地	瀬戸市品野町8丁目221-1		
自己評価作成日	令和 2年11月 8日	評価結果市町村受理日	令和 3年 4月 6日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&amp;JigvovsOcd=2372300752-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&amp;JigvovsOcd=2372300752-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	株式会社 中部評価センター		
所在地	愛知県名古屋市緑区左京山104番地 加福ビル左京山1F		
訪問調査日	令和 2年11月28日		

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

瀬戸市のはずれの自然豊かな場所にあります。リビングからは四季の移り変わりの山の景色がきれいに見えます。地域の中学生の職場体験や看護学生の実習の受け入れ、地域ボランティアによるイベントが多くあり、利用者様とのふれあいが特徴でしたが、今年はコロナウィルス感染拡大の影響でほとんどの行事の中止を余儀なくされました。家族様の面会も制限せざるを得ない状況でしたが、密にならない環境なので、職員と一緒に近隣の散歩や施設内での畑での野菜作りなどを楽しみました。11月にはソーシャルディスタンスに気をつけマジックショーを開催する事ができました。今後も感染に気をつけながらイベントが開催できればと思っています。好天であれば散歩は毎日出かけ下肢を鍛えました。下肢筋力の低下も見られる利用者様にはマッサージの先生に来ていただき機能を訓練を行っています。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

ホームは高台に位置し、リビングからは山々の景色が、四季折々に移り変わる様子を眺めることができる。管理者をはじめ職員は地元出身者が多く、地域と良好な関係を築いている。様々な人が気軽に集まれる、地域に開かれたホームである。1ユニットの小規模ホームであることを活かし、古き良き時代の日本家庭の雰囲気を出しつつ、利用者が共同生活を楽しみながら過ごせるよう工夫している。定期的に看護学生の実習を受け入れている。医療の現場でも認知症ケアが実践できるよう、利用者との関わり方を学ぶ機会を提供することが、ホームの大きな使命となっている。職員は、他のホームに見学に行って新たな気付きをもらい、利用者支援への学びを深めている。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ホーム理念は「普通の家で生活し、楽しい人生を送る」だが、その理念を管理者、職員が理解共有して入居者へのサービス提供を行っている。	理念を事務所に掲げており、その理念に沿って「職員も一緒に生活している」との思いを持って支援している。新人研修や職員会議などで理念について話す機会を作り、理解を深めるように努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年は地域イベントへの参加や地域住民を招いての行事が開催できなかったが、「子ども110番の家」として地域と繋がっている。	現在はコロナ禍にあり、地域との積極的な交流は自粛しているが、近隣住民から玄関先に野菜が届くこともあり、良好な関係が続いている。地域からは、「気兼ねなく訪問できる日が待ち遠しい」との声がある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近隣へ散歩へ行ったり運営推進会議等で認知症の理解を深め、自分たちの支援の方法を発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	開催できた運営推進会議では入居者と一緒に行った活動を報告するとともに取り組みの状況を報告し、意見交換しサービス向上に活かしている。	市に相談の上、新型コロナの感染状況を見ながら、書面での開催も行っている。ホームの近況や目標達成計画の進捗状況を報告し、出席者からは様々な意見が出されている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市役所、地域包括支援センターのご担当者様には運営推進会議に出席していただいたり、日常的に連絡を取り、ご指導をいただき良好な関係づくりに努めている。	運営推進会議に市の担当者が出席しており、制度に関する質問に回答してもらうこともある。管理者が窓口に出向き、空き状況を伝えたり疑問点を聞くなど、気軽に相談できる関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については年2回内部研修を行い広義狭義の身体拘束を理解するよう努めている。運営推進会議の中でも地域に発信し、拘束のないケアに取り組むよう努めている。	身体拘束等適正化委員会を運営推進会議に合わせて開催し、ホームとして身体拘束廃止に向けた取組みを報告している。言葉での身体拘束は、理解と実践が乖離しがちであるため、気づいたらその都度注意喚起を行うよう努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止の関係書類を職員全員で熟読、穏やかな目線、声かけに努めを心がけ、各々のケアを注意しあっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	施設入所をしていると権利擁護は現実的ではないが、制度の理解は必要であり、個々のケースでシュミレートしながら学ぶ機会を設けるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書はご家族様と一緒に音読み質問に答えながら丁寧に説明し、同意いただいている。契約後の改定は変更文書をお渡しし、理解、同意をいただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族の来荘時にご意見やご要望を常に伺い、代表者、管理者は運営に反映させている。	家族の訪問は多く、自由に来てもらい、職員とも気軽に話をしていたが、現在は玄関で距離を保ちながら面会する形とし、制限を設けている。出された要望等は記録に残し、職員間で共有している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常は管理者が職員の意見や提案を聞き、代表者に伝えているが、代表者は月1回の職員会議に出席し、直接職員の意見や提案を聞き、反映させている。	「スタッフ成長の指針」の一つに、意見は発信することが掲げられており、職員会議では多くの意見や提案が出される。管理者は職員の自主性を重んじ、職員が自ら発信したことを実行していくサポートをしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は実績や勤務状況を把握し職員からの要望にできる限り沿うようにし、各自が向上心を持って働ける環境・条件の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年は外部研修の機会がなかったが、毎月の研修を充実させ、スキルアップを図っている。研修内容は報告書を提出し、共有している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者はネット上での同業者と交流、意見交換等で事業所の質の向上を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の面談では意向や要望を十分に聞き取る。常に利用者と同じ目線で対応し、安心できる関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面談を通じてご家族の困っていることや不安に感じていることを十分に受け止め、信頼関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の困っている事を聞き見極めてどういった支援が必要かを考え、対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	普通の家で生活しているように一緒に家事をおこない、できる事は本人に役割を感じられるような心地よい声かけをし、できにくい事はさりげなく支援している。必ず感謝の言葉を言うようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の来荘時や定期的な連絡時には、施設での生活状況を伝え、問題点を共に考えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	自宅付近へドライブもしたり、墓参りなどを計画、馴染みの場所へのドライブなど関係は途切れないようにしている。	コロナ禍の中、馴染みの人との交流は難しい状況である。人との接触を避けたドライブで馴染みの場所に行き、紅葉をバックに記念撮影をするなど、馴染みの関係が途切れないよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の会話が弾むような雰囲気づくりをしたり、共通の話題を提供したりして関わりを支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	本人が退所されてからも本人や家族に連絡を取り相談や支援に応じている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの思いを尊重し、自分の思うように生活できるよう要望を傾聴し、個別ケアに努めている。思いの表出が困難な場合は本人本位に検討するよう職員会議で話し合っている。	日常会話の中で、思いや意向を汲み取り、実現に向けて取り組んでいる。現在は外出・外食の自粛により実現が難しいこともあるが、思いや意向は介護日誌等に記録し、職員間で共有している。	把握した思いや意向を介護計画に反映させ、利用者の思いの実現に向けて具体的な取組みがなされることを期待したい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者本人との会話や家族からの話をもとに、生活歴や生活環境を知りなじみの暮らしができるように支援している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人ひとりの生活パターンやその日の健康状態に応じて、できることを無理なく続けてもらっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者本人・家族の思いや要望を聞き入れ、職員の意見を取り入れた後、話し合い介護計画を作成している。月一度のモニタリングで意見交換をしている。	毎月、担当者会議で介護計画の達成状況を評価し、3ヶ月毎にモニタリングを行っている。モニタリングの結果を踏まえ、利用者や家族の意見を聞きながら介護計画に反映させている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	一人ひとりの介護計画をもとにサービスを提供し、日々の実践状況からの気づきや工夫を介護記録に記入、情報を共有し計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者本人や家族の状況を見ながらその時々ニーズに合わせてサービス提供ができるよう柔軟な姿勢で取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	医療・行政などフォーマルはもとより今年ではできなかったが地域住民・中学生のボランティアやとのつながりを深め、安全で豊かな暮らしができるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者全員が施設の協力医をかかりつけ医とし月1回の往診を実施。必要時は他科受診など適切な医療が受けられるよう支援している。	入居時に、かかりつけ医の選択が可能であることを伝えているが、往診対応している協力医へ変更することが多い。外来の受診は家族対応が基本であるが、職員が付き添うこともあり、柔軟に対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の訪問看護を利用している。24時間の連絡体制もあり、情報や気づきを相談しアドバイスを受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は家族と密に連絡を取ったり、面会に行き病院関係者との情報交換に努め、良好な関係づくりを図り、退院時には詳細な情報提供をいただけるよう努めている。(今年面会ができなかった)		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ほとんどの利用者・家族が当施設での看取りを希望されているが、事業所で可能・不可能な支援の話し合いを十分におこなっている。(例:医療行為の提供など)また行政・包括・医療関係者と連携をとってチームで支援していく。	終末期の対応は、医療行為が伴う場合を除き、利用者と家族の意向に沿うよう努めている。主治医および訪問看護と連携を取りつつ、家族と話し合っ支援体制を整えていく方向で取り組んでいる。	これまでホームでの看取りの事例は少なく、未経験の職員もいる。訪問看護師の協力を得て、より現実感のある研修を行うなど、看取りに対する職員の心構えを再確認することが望まれる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルを事務所に掲示。職員はこれを把握し、緊急時は速やかに対応できるようにしている。職員会議では常に確認している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災を想定し、2か月に1度防災訓練を実施、うち2回は消防署と連携の通報訓練をおこなう。土砂災害警戒区域にあるため事務所に避難場所、経路を掲示し常に意識し、台風や大雨時は地域との協力体制がある。	火災を想定した訓練に加え、土砂災害を想定した訓練を行っている。緊急時の対応手順や連絡網などを事務所に貼りだし、冷静に対応できるようにしている。民生委員を中心とした地域の協力体制も整っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの個性を尊重し誇りやプライバシーを損ねないような言葉かけに努めている。言われる事には否定せず、傾聴している。共感の姿勢を常に忘れない。	適度な距離感を保ちつつ、時には方言を交えながら親しみを込めた対応を心がけている。利用者の顔写真を載せた「ホーム通信」作成時やトイレ、入浴時には、特にプライバシーに配慮して取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者が自由に思いや希望を表現できるように働きかけている。思いや希望の表出が困難な利用者は職員主導にならないよう気をつけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にしつつ、施設側の決まりや都合とすり合わせ支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	清潔な身だしなみが保てるように、好みを聞きながら介助し支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事が楽しめるように、一人ひとりの好みや食べ方を尊重している。準備や片づけでは利用者に任せられる仕事を手伝ってもらっている。	毎食、調理職員が調理した家庭的な食事を提供している。おやつ作りでは、利用者も一緒におはぎやチヂミを作っている。誕生日には、利用者のリクエストに応える特別食を用意している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	バランスの取れた食事を一人ひとりの咀嚼、嚥下機能に配慮した形態で提供。水分量を確保できるよう介護記録に記入しチェックしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、声かけ、見守り、介助で口腔ケアをおこなっている。磨き残しや傷がないかなど口腔内の状態を観察し、清潔保持に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者一人ひとりの排尿排便パターンを理解し、その方の自立度に合わせたトイレ誘導することで汚染の防止に努め、快適に過ごせるよう支援している。	排泄状況を記録してパターンを読み取り、個々のタイミングに合わせた誘導をする等、排泄の自立支援に努めている。排泄用品は状況を見て職員で検討し、適切な物を選定している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	運動や水分摂取を促し、便秘がちな方は排便状態、回数を把握し腹部マッサージや服薬などで排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	体調を考慮しながらゆったりと入浴できるよう、また入浴中は好きな話題を提供している。入浴時間も可能な限り個々の希望に合わせている。	週2回の入浴を基本としている。入浴剤を入れたお湯にゆっくり浸かりながら、職員と会話をすることもある。シャワーチェアを使用している利用者もいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて休んでいただいている。また、寝つけない時には話し相手になり、安心してできるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者一人ひとりが服用している薬の目的、副作用、用量、用法を理解し服薬支援している。処方が変わった時は表にして掲示、服用後の症状の変化を観察し申し送りをおこなっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者一人ひとりの状態や得意な事を理解し、役割を見つけるようにしている。楽しみとして嗜好品の提供やドライブや散歩などの外出で気分転換を図っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天候や利用者の体調を考慮し積極的に外出支援をおこなっている。施設敷地内にある畑での仕事や玄関前にある階段で歩行訓練なども実施している。季節の花めぐり(桜、紅葉、コスモス)なども実施している。	コロナ禍でも、日課としている散歩は継続している。買い物など、人混みの心配がある場所への外出は自粛しているが、ドライブでの花見や紅葉狩りで気分転換している。庭での日向ぼっこで外気浴をして、リフレッシュすることもある。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	小遣いは事務所で管理し、その中から自分で管理できる2名は必要な分を所持し使ってもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族から電話や本人が希望される時は家族の都合や本人の状況に応じて電話をかけ、話してもらっている。手紙や贈り物などは一旦利用者にお見せして管理はできないものは事務所で管理している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者が快適に日々過ごせるように温度、湿度、音、光などを調整している。かつ家庭的な雰囲気を大切に環境づくりに努めている。季節に応じた壁面装飾をおこなっている。	南に面した窓が大きく、差し込む光が心地よいリビングである。壁には、利用者と共に作成したちぎり絵の作品やスナップ写真が飾られ、温かな雰囲気作りがなされている。適度に空気の入替えを行い、快適に過ごせる空間づくりに努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファを随所に置いて、独りでも利用者同士でも過ごせるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室では馴染みのある道具を使用してもらい、家族の写真や自分の昔の写真などで囲み、その人その人の個性を大切にしている。	仏壇や家族写真などを飾ったり、お気に入りの家具を持ち込むなど、それぞれ個性豊かな居室となっている。居室は清潔に保たれ、押し入れを活用して整理整頓されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室には表札をつけ、トイレの場所もわかりやすいよう大きく表示している。廊下や玄関には手すりを設置し、移動の安全を図り可能な限りの自立支援している。		